

—夏季大学雑感—

第12回夏季大学『新しい気象』講座雑感

気象協会北海道本部 若 林 徳 司

この夏も日本気象学会北海道支部と札幌市青少年科学館との共催により、昨年と同じ7月28日（青少年科学館）と29日（気象協会）の両日にわたり開催された。

1993年の夏は記録的な冷夏となり、農業だけではなく各産業界にも大きな影響を与え景気低迷の一因ともなった年でした。それとは対称的に1994年の夏は太平洋高気圧の勢力が強く、本州は勿論のこと、爽やかさが売りものの北海道でも連日30度を越える猛暑。（札幌の7月における真夏日は8日で1978年に継ぐ記録である。）

この暑いさなかでの開催のせいであろうか、当初50名の受講申し込みにたいし、当日の受講生は44名でいつもの年より若干減少したのが担当幹事としては多少気がかりなことでありました。しかし、受講生はいずれも熱心で活発な質問が寄せられ、気象に対して大変興味をもたれていることが十分伺えました。

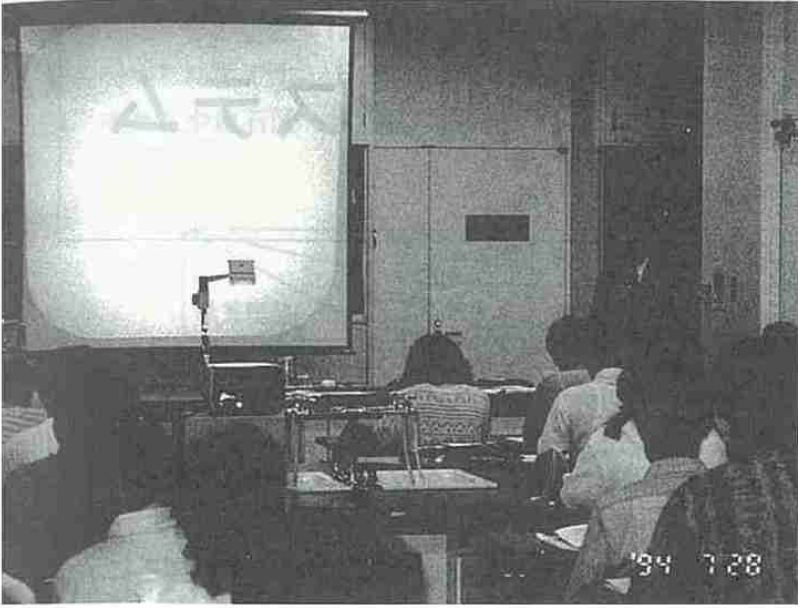
今年の受講生の特徴は小・中学校及び高校の先生方が多く見られたこと、ある程度の専門知識をもっておられる方が参加されていたことなどがあげられます。これは1995年5月から実際に施行される気象予報士制度と少なからず関係があるのかもしれませんが。また、例年の受講生は札幌近郊の方々にある程度限定されている感がありましたが、今年は遠く山口県岩国市、千葉県柏市から、道内でも釧路市、斜里町、長万部町からの参加をいただきました。この講座のあることをどの様な方法で知り得たのか興味のあるところです。多分、札幌市の広報誌が届くことはあり得ないので、学会誌である『天気』または気象協会発行の雑誌『気象』などに掲載してある開催記事を見られたものと推測されます。

ここで一つ考えさせられることは、これら天気及び気象に掲載している記事は日時及び会場だけのいたって簡単なものです。このように遠くから受講を希望される方が失望されることのないように次回からはある程度、講義内容が理解出来る記事に改める必要性を強く感じました。

最後になりましたが、この講座の開催のためにお手伝いをいただいた札幌市青少年科学館の学芸係、気象協会北海道本部の総務課・気象情報部の皆さんに厚くお礼申し上げます。

追 記

この講座開催にあたっての支部長挨拶（菊地勝弘教授）の中で気象学会へのお誘いのお話しをしていただいた結果、早速2名の方が入会をされましたので御報告いたします。

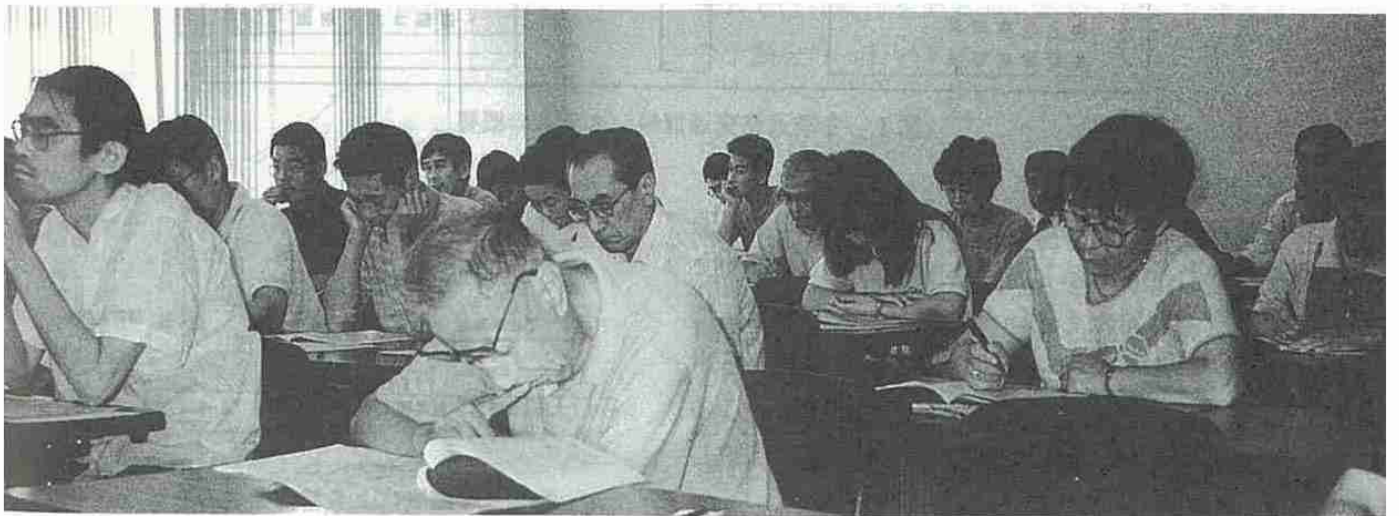


第12回夏季大学「新しい気象」講座

◀ 受講風景  
(青少年科学館にて)



◀ 気象情報センター見学  
(気象協会北海道本部にて)



▼ 受講風景  
(気象協会北海道本部にて)